アーカイブ時代における
公共性の再構築の可能性をめぐって

西　兼志
（東京大学大学院情報学環特任研究員）

1

自己紹介

- 東京大学大学院情報学環
  特任研究員
- 専門：メディアを中心とした
  コミュニケーション学
- '06年グルノーブル第三大学
  情報・コミュニケーション学
  博士課程修了
- '08年グルノーブル第二大学
  哲学科博士課程修了
- '08年11月　水島久光との共著書
  『窓あるいは鏡』刊行予定

2

メニュー

- 1.アーカイブ型社会の到来
- 2.INAの例
- 3.アーカイブ型社会をいかに対象化するか？
  ～B.スティグレールの思想をめぐって～

3

1.アーカイブ型社会の到来

4

アーカイブ型社会の到来

- デジタル機器の一般化
→生活の隅々にまで情報端末が広がる
→アーカイブが「環境」となる
- この状況をいかに対象化できるか？

アーカイブ型社会を捉える
いくつかの視点

- ポスト「フロー」型社会
  デジタル技術による放送と通信の融合
  INA
- ポスト「消費」社会
  コンテンツ消費、＜キャラ＞消費
  cf.「データベース型」消費
- ポスト「規律」社会
  管理＝監視社会（プロファイリング、バイオメトリクス・・・）
- ポスト「知識」「情報」「生政治」・・・

6

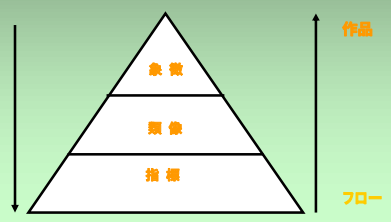
ポスト「フロー」型社会としての アーカイブ型社会

- 出版をモデルとした作品 (work) から
  放送 (flow) のメディアへの変化
- テレビのアーカイブ化＝フローのアーカイブ化
- 「フロー」を対象とするがゆえの困難
  技術的困難：データー量の飛躍的増大
  社会的困難：聖別化された対象ではない
  時間性の困難：フローの時間／アーカイブの時間

7

記号のピラミッド
by Daniel Bougnoux

- フローのアーカイブ化 (←デジタル化) をどう考えるか？



8

記号のピラミッド

- 象徴：モノから離脱し脱文脈的に
  ＝いつでもどこでも通用する
- 類像：モノとの類似性を維持し文脈依存的
- 指標：モノとの直接的関係＝接触によって規定され、いまここの文脈に埋め込まれている

9

記号のピラミッドからのメディア

- 出版をモデルとした「作品」の秩序=象徴的メディアに対して テレビは「いまここ」に存するメディアとして指標的メディア
- グーテンベルクの銀河系から、
  19世紀のアナログメディア革命を経て、
  現代のデジタルメディア革命に至るメディアの変遷は、
  象徴から指標へとピラミッドを下降するベクトルを描き出す
  →指標的コミュニケーションの前景化から複製技術化
- デジタルベースのアーカイブ型社会は、ピラミッドの階層を無化し、あらゆる「記号」を「情報」「データ」に還元する

10

アーカイブの可能性

- デジタル技術とともに放送だけでなく、
  研究の環境も大きく変化
- 放送、研究とも利便性が高まった半面、
  かえって足枷になることも

→このような環境で、
放送と研究の架け橋になるのがアーカイブ
そして、それを証明しているのがINA

11

2. INAの例

12

INAとは？

- 「もし、ルーブル美術館が歴史の劈頭に誕生していたらどうなっていだろう？今日、INAが直面しているのはこのような問題である。」（本文、p.131）

→放送に関する
制作・育成・アーカイブを担う
→テレビ、ラジオなどの放送メディアを対象にしたアーカイブ
→「作品」ではなく「フロー」を対象にすることに伴う本質的な困難に取り組んできた

13

INAの規模

- 全予算約1億1000万€
  2/3にあたる7270万€は放送受信料から
  残りの1/3は資料の活用による利益から
- '00年からは「COM」による2100万€の特別予算
- 職員：約1000人

『INA』構成

- 第一部　INAの歴史－創立から発展
  ・第一章 起源から1986年まで－創立者たちの時代
  ・第二章 1987年から1995年－営利活動から研究まで疑問を突きつけられる時代
  ・第三章 1995年から現代－技術の時代
- 第二部　今日のINAとその課題
- 第三部　未来のINA

15

INAの歴史（1）
～誕生～

- 1974年に設立
- ORTFからRTFへの改組の一環として、7つの事業体－三つのTV局、ラジオ局、制作会社、ネットワーク整備－の一つとして誕生
- 「産業的・営利的性格を持った公共施設 Etablissement à caractère industriel et commercial」
- 二つの使命
  →番組を「文化遺産」として保存、活用
  →放送局に対する商業的サービス
- 三つの活動
  →アーカイブ、人材育成、制作・研究

16

INAの歴史（2）
民営化の功罪～80年代：発展と危機～

- 80年代に民営化
  →新設の放送局および既存の放送局の放送時間の延長により過去の映像の需要が増す
  →しかし、新設局はINAに対する納入の義務がなく、またフィクションなどが納入義務を免れるようになった

17

INAの歴史（3）
法定納入の制定～90年代：展開～

- 1537年　モンペリエの勅令
- 1925年　写真・レコード・映画にも適用
- 1992年　ラジオ・テレビ番組にも拡大
  →最後の改正が行われたのは'43年
- ほぼ網羅的に納入・収集
- しかし、営利的運用は禁止され、研究目的に絞った保存・公開が義務づけられた

18

INAの歴史 (4)
COM～00年代：デジタル化～

- Contrat d'objectifs et de moyens
  第一期2000~2003 第二期2005~2009
  →PSN (Plan de sauvegarde et de numérisation)
  →Inamédia
  →ina.fr
  →Archives pour tous

19

INAの現状

- 2007年の時点で、400万時間の視聴覚資料
  (テレビ180万時間　ラジオ220万時間)
  商用アーカイブ
  テレビ70万時間　ラジオ80万時間
  法定納入アーカイブ
  テレビ110万時間　ラジオ140万時間
- 毎年、30万時間の新たな資料が流入

20

INAの未来(1)

- デジタル化とともに、新たなフローに関しては、

「すべてを保存できないなら、何を優先的に保存すべきか？」
ではなく
「すべて保存できるからといって、そうすべきだろうか？」
が問題に

- しかし、ユネスコは既存の視聴覚資料2億時間分が消失の危機にあると推定
  →特に80年代のビデオに保存されているものがもっとも脆弱
  →INAでは2015年までにデジタルによる保存を完了する予定

21

INAの未来(2)

- 新たな記憶の問題：Webの保存
  →INA：視聴覚的サイト
  BnF：その他のサイト
- メタデータの充実化によるアーカイブ管理
- デジタル・マーキングによる権利管理
- マルチメディアを利用したオリジナルな制作

22

INAの発展を実現した三つの軸

- 法律
  法定納入
  権利者 (俳優、脚本家団体など) との団体交渉
- 技術
  ソフトは内部で開発.ハードは民生機ベースで対応
- 社会
  公共性

23

まとめ～INA発展の三つの軸～

法律　　社会

技術

・これらの三つの要因の重なり合いによって成立
・「偶然と意志の産物」

24

INA利用の現状

商業利用→Inamédia
（04年開設）

学術利用→Inathèque
（93年設立）

25

INA利用の現状

- 約150人のドキュメンタリスト
- メタデータ
  資料的データ：クレジット、放送日時、内容
  法務関連のデータ：制作の性質と著作権者
- 映像のインデキシング

→これらのデータを「ハイパーベース」「メディアスコープ」で管理・活用

26

Inathèque

ハイパーベース

メディアスコープ

27

3. アーカイブ型社会をいかに対象化するか？

～B.スティグレールの思想をめぐって～

28

B.スティグレール

- 現代フランスにおけるもっとも重要な哲学者
- 主著『技術と時間』シリーズでは、技術と記憶、意識の問題を根源的に論ずる
- コンピエーニュ工科大学教授、INA副所長、IRCAM所長等を歴任後、現在、ポンピドゥーセンター文化開発局局長

→スティグレールの哲学は実践と不可分の関係にある

29

ハイパー産業社会と象徴的貧困

- ポスト産業社会ではなくハイパー産業社会
  ＝精神までもが産業的搾取の対象となる
- 文化産業が生産する産業的時間対象が
  意識の流れをコントロールする
  →ここから帰結するのが象徴的貧困
- しかし、デジタル技術はこのような社会を
  捉え返す可能性を与えもする

30

「時間対象」の再対象化

- IRI（リサーチ＆イノベーション研究所）
  ←スティグレールが'07年に
  ポンピドゥーセンターに設立

- ハイパー文化産業を批判する
  テクノロジーを開発

31

タイムラインLignes de temps

- 時間対象を空間化、可視化するツール
  映像の書き取りや
  対象とその分析を同一平面で処理を可能にする
  ＝テクノロジーベースのメディアリテラシーツール
- デジタル技術を逆用することによる
  インテリジェントな分析・批判

公衆 le publicから愛好者l'amatoratへ

- デジタルを活用した協働のためのプラットフォーム＝
  作品を開く回路の設計
  →ハイパー文化産業時代の批判
- そこに参加し、実践することによる
  愛好者＝作品を愛し、単独性を担う者の復権

→・アーカイブ型社会における
「個」あるいは「参加parti-cipation」のあり様の変位
・指標的コミュニケーションによる「いまここ」への
閉塞を再定位する可能性

33

ご清聴

ありがとうございました

34